

待

子ども待ってもネット開設工事に至らない。業を煮やして電話をしたら延期を言われた。無償レンタルのモバイルルーターを送ってもらって、最低限のことはできるようにしたが、先日また延期の電話がかかってきた。延期が二度に及ぶということは三度目もあるかもしれないということか、と聞くと、否定できないという。なぜそんなに遅れるのかと聞いても、こちらに知識がないせいもあるが釈然としない。たまたま、別の某社に電話をした。これまでの経緯を洗いざらい話して、どうしたものだろうか和相談すると、言葉は慎重だったが、要するに二股をかける、と言う。当社とも契約して、工期が両方から出たのを見て、一方を契約、他方をキャンセルすればいい、と。なるほどその手があるのか、と蒙を啓かれる思いがし、その社に対するイメージが急上昇した。促されるままに手続きをし、工事を申し込んだ。聞いたことのない関連会社の名前をいくつ上げると、すぐにその会社から連絡があつて、同じような必要事項を尋ねるから、お手数だが答えてほしいということだった。面倒だったが、「お客様のネット環境が早く整うように努めます」と先の会社が決して口にしなかった殊勝なことを言うので、協力を惜しまないという気持ちになった。

数日後、昼寝をたたき起こされて電話に出てみると、わずかに聞き覚えのあつた関連会社からだった。「ネット工事新規申込みのお客様にお得なキャンペーンのご案内です・・・」ウォーターサーバーが今だと無償でお送りできますと言う。ぼんやりした頭で、なぜそんなものを送ってくるのか理解できず、徐々に音声が届いていったが、向こうはなぜこんなお得なサービスに素直に従わないのだと言わんばかりに早口でまくしたててきた。「今、物は何もいらぬのです」とどうにか断る。

その翌日、また別の関連会社にたたき起こされる。「電気料金がお安くなります。ネット工事お申し込みのお客様対象の・・・」立て板に水のまったく澁むことのない説明がしばらく続き、「ここまでで、ご不明な点やご質問などありますか?」。ご不明なのは点ではない。すべてだ。あなたの言っていることがさっぱりわからない。これで言われるままに契約に及べば、特殊詐欺にひっかかるのと何ら変わらない。

これだけ何の滞りもなくしゃべられるようになるまで、どれだけ同内容を繰り返ししたことだろうか、苦勞している落語教室生たちの顔を思い浮かべた。うんざりしたばかりの中で、今、遅れるとしか言っていない会社のイメージの方が回復してきている。

2025.6.2

1493号(夕焼け通信 創刊1993.4.23)

〒690-0871 島根県松江市東奥谷町386-7 gosuitei.sakura.ne.jp/yuyake/ 編集 宮森健次

## 老い老いに 木幡智恵美

36

世

紀末の千九百九十九年、世界は終わりを告げなかった。二千年に突入、新世紀を迎えた。年頭の日記にこんなことを書いている。

子どもの頃、二千年になると四十四歳のおばあさんかあと思つていた。そのおばあさんになってしまった。元旦の今日、夫と長男と三人で初もうで。はしゃぐ私に、「お母さん、子どもみたい」と長男。いつまでも気持ちは子どもでいたいものだ。

子どもの頃の四十台はおばあさんのイメージだった。実際四十台で祖母さんになる人はざらにいた。母もそうで、私が高校生の頃にまだ三十代だった。今、四十代、五十代でもばりばり現役世代だから、世の中変わったものだ。今年古希を迎える私は真正正銘のおばあさん。はしゃぐこともなくなり、身体はがたがた。考えることといえば、死ぬまでにかねばならない身辺整理のことばかりだ。

すっかり老いてしまった今、新世紀となつてすでに四半世紀が過ぎたが、二千年というのはどんな年だったのだろう。十大ニュースを挙げてみる。

一、小淵首相倒れ、森連立内閣発足 二、有珠山と三宅島が噴火、鳥取西部で大地震  
三、西鉄バス乗っ取り事件など十七歳少年犯罪頻発 四、シドニー五輪で日本女性陣が大活躍、マラソンの高橋ら金 五、雪印食中毒、三菱自クレーム隠しなど企業不祥事相次ぐ 六、そごう、千代田生命など破綻 七、介護保険制度がスタート 八、日銀が一年半ぶりにゼロ金利政策解除 九、衆院選で自公保後退、民主躍進 十、旧石器の発掘でねつ造発覚

もう四半世紀前になるのか、あの地震は。昼休みに校庭で子どもらと遊んでいる時に、突然地面が揺れ、立っていられずしゃがみこんだ。頭にはよきよきならと泣かないで♪の曲が流れた。五木ひろしが歌う『明日の愛』日本沈没のテレビドラマの主題歌だ。地鳴りがするたびに体育館のガラスが大きな音を立て、校庭の真ん中に集まった子どもたちから泣き声が漏れた。児童全員を保護者の手に渡すまで、怖くて長い時を過ごした。

海外では三位にプーチン大統領就任が挙がっている。肩書だけ首相となつた期間を挟み実質四半世紀にわたつてロシアを牛耳っている。いつまで君臨するつもりだろうか。

30代フリーター トランプ政権は高関税政策を国内外から批判されながら、それでも4割強の支持率を保っている。

年金生活者 トランプによるアメリカの方向転換は、長期的にはいずれそうなる未来を先取りし、短期的にそれを実現しようとするものだ。企業が未来の技術を他の企業に先んじて実現するイノベーションに似ている。未来と現在の時間差を空間的な差に置き換えることによって企業に利潤がもたらされるように、トランプ政権には相応の支持率もたらされる。

30代 長期的にはいずれそうなる未来とは？

年金 すでに進行しつつある覇権国家Ⅱ「世界帝国」としての地位の喪失だ。圧倒的な軍事力で維持する世界の安全保障システム、基軸通貨ドルの力で支える自由貿易体制は、覇権国家Ⅱ「世界帝国」としてのアメリカの足場をなしてきた。

だが、アメリカの軍事力はテロとのを他国による搾取の結果と錯覚し、取られたぶんを取り返す戦いの武器に高関税を選んだ。自由貿易体制は第2次大戦後、アメリカが主導してつくったものなのに、トランプのアメリカはそれに背き、それを損壊する自己矛盾に陥っている。

アメリカにとって国際法は同時に国内法でもある。それはこの国が「帝国」だからだ。柄谷行人は「帝国の法は、根本的に、国際法なのです」と言う（『帝国の構造』）。「帝国は多数の国家の間に生じる。しかし、それはたんなる国家の拡大ではありません。帝国は、多数の共同体Ⅱ国家からなると同時に、それらを超える原理をもたなければなりません」（同）。その「原理」のひとつが法にほかならない。「この法は、小さな部族や国家を超えた領域で通用する法、いわば、万民法です。帝国の関心事は、諸部族・国家を支配することだけでなく、それらの『間』、いかえれば、諸部族・国家間の交通・通商の安全を確保する

戦いによる消耗や中国の軍事力の膨張によって相対的に低下した。中国の経済大国化はアメリカの製造業の衰退に拍車をかけ、自由貿易体制を中国に有利なシステムに変えようとするとともに、ドルの地位を脅かし始めている。

このまま行けば、いずれ覇権国家Ⅱ「世界帝国」としてのアメリカは完全没落する。すでに始まっているその衰退は、これまでアメリカの「足場」であった世界の安全保障システムや自由貿易体制を「足枷」に変えつつある。

トランプはその変化を鋭敏に感じ取り、その進行を急加速しようとしている。そうすれば、未来を先取りし、現在の時間差による政治的な利潤を手にすることができると言える。具体的には、「足枷」からすぐにでも解放され、アメリカの黄金時代が始まる、と訴えて国民の広い支持を得ることができると言える。

30代 トランプは法をつくったり、変えたりすることによってではなく、法に背くことによってその政策を遂行し

ことです」（同）  
アメリカの場合、「諸部族・国家」に相当するのが、イギリス人によって東海岸に築かれた13の植民地などだ。現在の諸州の前身であり、イギリスからの独立後に制定された合衆国憲法は「部族や国家を超えた領域で通用する法」に相当する。アメリカの憲法は当初から国際法としてつくられた。

第2次大戦後、アメリカが覇権国家になり、「地域帝国」から「世界帝国」

ようとしている。

年金 法をつくったり、変えたりするには、法に定められた手順を踏まなければならない。トランプはそれが嫌で、政策の立案・遂行を自らが得意とするディール（取引）にしたがっている。ディールなら、そのたびごとに法をつくったり変えたりする必要はない。不動産業出身の彼はそれに慣れ親しんできた。

その振る舞い方は、エリートたちのつくった既存の法のせいで不遇な目に遭っていると考えている層の心に「法をぶっ壊せ」というアジテーションとして響いたに違いない。トランプが大統領選に落選したとき、支持者らが議事堂にだれだれ込んだ事件はそれが噴出した結果だ。

30代 トランプ関税は経済の問題にとどまらず、自由貿易体制を維持するために世界貿易機関（WTO）の設置などを定めた国際法に違反する法的な問題だ。

年金 トランプはアメリカの貿易赤字

に飛躍すると、あらゆる国際法がアメリカの国内法にもなった。トランプはその国際法Ⅱ国内法の支配に刃向かい、それを壊そうとしている。それらの法は覇権国家Ⅱ「世界帝国」だったアメリカにとって、世界を統治する道具だったが、その座からずり落ちつつある現在、自らを縛る鎖になりつつある。トランプはそれを断ち切りたい。

しかし、アメリカが世界の覇権を失っても、国際法は残るし、国際法が同時に国内法でもある合衆国の構造も残る。それを壊そうとすれば代償を支払わされる。トランプ関税は国内外から反発を受け、切り下げざるを得なかった。

30代 トランプは自分のしていることを「常識の革命」と言う。革命は必ず反革命を惹起する。民主党への政権交代など揺り戻しは必至だ。

年金 ただし、長期的には覇権国家Ⅱ「世界帝国」の解体という「革命」の目指す方向にアメリカが進むことに変わりはない。

ニュース日記 970  
中村 礼治

## トランプの「革命」